

水俣学研究センター20周年に寄せて

中村 沙絵

東京大学総合文化研究科准教授、熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員

生きている言葉（足立先生の思い出）

私が初めて水俣に行ったのは大学院生の頃で、そのきっかけをつくってくれたのは指導教員の故足立明先生だった。スリランカで高齢者の研究をしていた私に「色んなことよく知っているお姉さんたちがいる」と田尻雅美さんと井上ゆかりさんを、そして先生の幼馴染でもある花田昌宣先生を紹介してくれた。

足立先生が2011年の『水俣学通信』に寄稿した、「モノをめぐる水俣病事件の社会史」という短い記事がある。「街の中心に巨大なモノとして居座るチッソの工場。汚染海域の埋め立て地などの改変された空間。これらには「関わった人々の記憶や思い…抗争の痕跡」が込められていて、私たちの「創発的な意味づけや行為を誘い出す」という（足立 2011: 7）。例えとして、百間排水口を「水俣病爆心地」と呼ぶといった「名づけ行為」をあげている¹⁾。

アクターネットワーク理論（ANT）を地域研究にならすことを考えていた足立先生は、当時（ネットワークを媒介するモノ、人に加えて）「言葉」についても考えなあかん、とよく言っていた。ここでいう「言葉」とは、単なる表象、事物に貼り付ける中立的なラベルではない。それは、いつもの先生の例えにならうなら、お酒を口に含み、舌でしばらくころがせ、う〜ん…という絡まり合いのあとに、口をついて出てくる「うまいっ」というような「言葉」だ（内山田 2014: 171）。モノや空間に誘発されて生まれる意味づけ。身体がモノや空間と絡まり合うなかで生まれる感嘆や叫びのようなもの。そうした生きた言葉が紡ぐもう一つの歴史を、足立先生は水俣に見ていたのかもしれない。

水俣にいくと、そこで出会う人の言葉のなかに力を感じる。下記の「臨地キャンパス」の企画に先立って参加した水俣病事件研究交流集会で私が衝撃をうけたのも、そこが「言葉が生きている」場だったからだ。言葉はまず、「痛い」「苦しい」「許せない」と迸る叫び——あるいは、傷ついた細胞が発する「ちっちゃいこえ」（ビナード 2019）——として存在しているようだった。研究者や専門家が専門的な用語を使う場合は、身体を通して生まれた言葉やざわめきを、いかに別の表現に効果的に置き換え、現実を少しでも動かすことができるかが賭けられているようだった。水俣の世界に惹かれ小説や伝記に手を伸ばすと、それらの言葉もやはりまた美しさと哀しみなどを湛え、不思議な力をまとって迫ってきた。私のなかにある〈言葉〉と〈生〉の関係への関心には、水俣での経験がたしかに影響している。

水俣臨地キャンパス

足立先生を見送って4年半ほど経った頃、同僚の飯田玲子さん（現・金沢大学）、藤倉達郎先生らと一緒に「水俣臨地キャンパス」を企画した²⁾。大学院生を連れての研修というかたちで水俣に飛び込んでみようという決意は研究交流集会で固まったが、人脈も知識も何もない。訪問場所を一緒に考え水俣の方々につないでくれ、サポートしてくれたのは田尻さん、井上さん、そして現地センターの皆さまだった。花田先生の「まずは10年間通ってみる」という一言も、力強く背中をおしてくれた。

参加者とは毎年一緒に可能な範囲で事前学習をして、基本的な知識を整理してから水俣へ向かった。現地で留学生たちに通訳をすることもあり、自分たちの役割は「正しい情報を学生に伝えること」だどどこか気負っていた面もあった。しかしプログラムが開始すると、与えられた情報を理解するのもままならないといったありさまだった。宿に戻ってからメモを片手に反省会をし、書籍を確認し、赤木先生のラボで走り書きした化学式を読み解いたりした。

行程は報告書に詳細記録してあるので、ここでは報告書をよみながら地域あるいは現場（フィールド）に臨むことの意義について改めて考えたことを記録しておきたい。

一つ目は、事象の複雑さを知ること。少なくない学生が報告書に記していたのは、単純な図式では語れない複雑さだった。「知れば知るほど、立場の多様さに混乱した」（高道 2017）「ではどうしたらよいのか、ついにわからなかった」（中野 2017）とあるように、水俣病という出来事をめぐる人びとの立場は極めて多様で、何か一つの説明に収まるものではなかった。私たちは、誰（どの立場）の視点に立つかによって同じ出来事がまったく異なる輪郭を帯びるということを知り、複数の視点が並び立つなかで、すべてを見渡せる完全な理解など



図1 赤木先生のラボでの講義。洗練された実験の手つき、カレンダーの裏面が全面に貼られた長机、お菓子箱の収納箱、美味しいミカン、すべてが魅力的だった。2019年1月11日撮影



図2 2019年度「水俣臨地キャンパス」の集合写真。この頃には恒例メンバーや日本人学生を中心に通訳は皆で手分けをしていた。
2020年1月8日撮影

不可能であると認めることを学んだ。

二つ目は、誰かの生の強度にふれること。水俣ではたくさんの方がその人生を分かち合っ
て下さったが、それは贈りものであった。一人ひとりが、カテゴリーや立場の枠内におさま
る何か (what) ではなく、ただその人であるとしかいいない誰か (who) として、私たち
を迎え入れ、ゆさぶった。ほっとはうすでの金子雄二さんの言葉 (「父の顔を見たことはな
いけれど、いつも心の中にいる」) を胸に刻んだ学生の記録や (Saw Win Myo San 2019:
42)、「海は私を静めてくれる」と話された佐藤英樹さんとスエミさんの姿に、「[深い傷を
負っていながら] 生命の喜びが周囲に伝染していくような明るさに心を打たれた」といった
文章には (Kia Men 2017: 125)、こうした強度のある経験が映しだされている。

三つ目は、語りの隙間に息づくものに気づくこと。水俣病が地域を分断した痛ましい現実
の傍らで、日々の暮らし、変わらぬ風景、おいしい食べもの、ささやかな関わり合いが息づ
いていることは、少なくない学生の関心をひくものだった。水俣周辺の歴史的建造物を訪ね
て散歩したときの何気ない地元住民とのやりとりを記録した学生もいた。もしかしたら、語
りを外へと開いていくことには、被害の可視化がなお不十分な状況で、加害の構造をばかし
てしまうのではとの懸念を抱く方もいるかもしれない。それでも私は、何度となく表現され
た「まだ語られていない何かがある」という感覚を大事にしたい。そこには見知った説明で
はなく生の現前^{なま}からその地域を知る (土井 2021) ヒントが隠れている気がするからだ。

四つ目に、研究者や学生としてそこを訪れた自分の立ち位置が揺らぎ、行動や思考をかき
立てられるような経験を、少なくない参加者がしていたことを挙げておきたい。中国出身の
留学生 Sese Ma さんにとって、明水園で経験したとある患者の女性とのまなざしの交錯は、
自分が「観察する側」にいるという非対称性を、強い身体感覚として突きつけるものだった。

〔明水園〕での遭遇は、「参与観察者」としての自分の立場の偽善性をまざまざと突きつけるものだった。見学中、私は昼休みの時間に、病室のベッドに腰かけていた60代ほどの女性とふと目が合った。扉は常に開けておくよう義務づけられていた。私は思わず笑みを返し、軽くうなずいた。すると彼女は不快そうな表情を浮かべ、視線をそらした。(Sese Ma 2019: 44翻訳は筆者)

視線をそらした女性の同意なしに、その苦しみを観察し、自分なりの判断や言説をつくることを許されていること。行動する力をもちながら、何もしないことを許された「学生＝観察者」としてそこに存在していること。その非対称性にいたたまれなさを覚えたという(Sese Ma 2019)³⁾(私はこの記述を読みながら、石牟礼道子が「ゆき女聞き書」に記した、釜鶴松との出会いの場面を思い起こさずにはいられない)。

五つ目。とりわけ参加者の半数ほどをいつも占めていた留学生にとって水俣は、「先進国」日本の「過去の過ち」と「復興モデル」を学ぶ教科書(という一般的なイメージをなぞるもの)ではおそらくなかった、ということ。JNCの高いフェンスを見て、母国マレーシアで起きた(三菱化成も関わる)放射能汚染事件を思い出したキアメンさん(Kia Meng 2017)も、「あらゆるレベルの意思決定において、市民が政府に説明責任を求めるべきだと学んでいる」と書いたアゼブさん(Girmai 2019)も、きっと思考のなかで水俣と母国の現実とを行きつ戻りつしていた。彼らにとって水俣という現場に臨むことは、経済成長を最優先することで世界とのつながりを失い、人間らしい生が損なわれた極めて具体的な現実を目撃すること、世界とのつながりを取り戻さんという真摯な祈りにふれること、そして、そのいずれもが〈いま・ここ〉に確かに在ると知ること——だったのではないだろうか⁴⁾。

留学生の縁、ミャンマーとその後

京都大学にはミャンマーからの留学生が多く、母国で国家公務員として環境保全政策に携わっていた方も少なくなかった。小規模金鉱山の水銀利用の研究を志していたPyae Soe Soneさん、臨地キャンパスの恒例メンバーとなったNyein Chanさん含め、多くが一緒に水俣を訪れた仲間である。彼／彼女らやその指導教員の竹田晋也先生のサポートもあり、水俣学研究センターの皆さんとともに2019年3月、ミャンマーの政府・国立研究機関との協定締結を視野に入れた短期視察を行う機会を得た。



図3 ミャンマーでは、当時京大農学研究科に在籍していたPyaeさんの付き添いのもと視察を行った。2019年3月27日撮影



図4 ミャンマー視察中にツリーハウスとつり橋をみつけた。
左から中地先生、高峰さん、花田先生。2019年3月29日撮影

ミャンマー訪問の詳細については、すでに公刊された報告に譲る⁵⁾が、一つつけ加えたのが、採掘村のCSR (Corporate Social Responsibility) についてだ。2018年に発足したCSRは、企業の社会貢献活動と同名ながら、実態は村の行政組織、開発委員会、企業が混ざりあったもので、村の小規模金鉱山とは切っても切れない関係にあった(村長が会長、村の主要坑道のオーナーがメンバー。村経営の坑道のオーナーは村長で、週1回入札による金の売却で得た収益の4割は村の坑道の維持や理事の給与に使われ、残りの6割は上位行政区分である郡のCSRに上納、「地域開発」に利用される。村で小規模採掘をする者は、登録の有無にかかわらずCSRに手数料を支払うことになっている)。

その後、二次資料を読んでわかったことがある。CSRが発足したのは、新政権発足後、鉱物資源の収益を中央で占有せず地方にも分配し、民主的に地域/民族間の格差を是正するための諸改革と時を同じくしていた。また2000年以降の国際金価格高騰を背景とする小規模金鉱山の急増を受けて、小規模金鉱山を地方レベルで制度化する動きとも重なっていた(NRGI 2018; PACT 2019)。つまり、資源の地方化と小規模金鉱山の制度化という新政権下での2つの要請の交点にCSRはおそらく位置づけられていた、ということだ。ただ実体としては、制度以前から存在してきた非公式の徴収や調整関係を「CSR」という名のもとに束ね直したのだろう。公的な装いをまとった統治のグレーゾーンでは、中央政府の管理が及ばないなか、水銀が「タバコと同じようにどこでも」売られていた。

私たちがマンダレー管区S郡A村で垣間見たのは、金採掘・精製を軸に生活のリズムが刻まれ空間が改編された、いわゆる「採掘村」の暮らしだった。民家の庭のような場所にできた金精製作業場で採取した金成分に無機水銀をいれてアマルガムをつくる女性たち。「約40年間、この仕事をしている」とアマルガムの加熱処理を見せてくれた男性。みな、最低賃金ほどの給与で働いていた。金販売店は潤っているようにみえた。その裏庭では、店が買い

取った金の純度をあげるために居住空間内で精製を行なう作業員と、すぐ隣の台所で調理をする女性たちの姿があった。何十年かけて築かれた日常の、見えにくい場所（＝労働者たちの身体？）に毒がゆっくりと溜まっていたとしても、分かりやすい症状が出ない限り、感知するのは難しいだろうと思われた（採掘現場はやや状況が異なる。鉱山で夫を亡くした女性たちの話から、死亡率の高さがうかがえた）。

視察の過程で、水銀の吸入に限らず、硝酸や亜硝酸などの窒素酸化物の吸入、呼吸器への悪影響、粉塵による健康被害などの項目が浮かび上がってきていた。試料を採取・分析できた暁には、これらの健康影響、具体的な保護具の着用などの助言をする見込みもあった。「規制」の難しい統治のグレーゾーンだからこそ、こうした具体的な数値や道具や助言が何らかの変化をもたらすかもしれないと、期待を抱いていた。しかし――

クーデター後、かつてのグレーゾーンは今やその輪郭さえつかめない闇に沈んでしまったかのようだ。マンダレー地方域でも、反軍勢力と国軍の衝突が日増しに激しくなり、金鉱開発地帯をめぐる各勢力が実効支配を争う状況が続いている⁶⁾。軍・企業・武装勢力・行政が入り混じる不透明な構造のなかで、違法採掘や土地収奪、暴力の報告が急増しているとの記事もみる⁷⁾。あの村の人々はどうしているのだろう。政治的混乱は市民科学の挑戦も、大学を介した草の根の交流も断ってしまう。途切れていく関係の背後に多くの人命と暮らしが脅かされている現実がある。その損失はあまりに大きい。

水俣とスリランカをつなぐメディカル・アクティヴィズム

制度や行政より先に現場へ降り、はっきりとした形をとらない傷や痛みを耳を澄ませる人びとは、水俣にもスリランカにもいる。最後に、メディカル・アクティヴィズムについて触れておきたい。

スリランカのキャンディ国立病院の腎臓内科医ニシャンタ先生は、マハヴェリ河開発計画によって造成された入植地で深刻化した原因不明の慢性腎臓病（CKDu）に長年向き合い、都市部から遠い地域で訪問診察を続けてきた。スリランカ政府は「よりよい生活」を掲げ大規模水利事業を推進し、入植地を増設し、貧しいシンハラ農民を移住させたが、その地で原因不明の腎臓病が増え続けている。水質、農薬、重金属、熱ストレスなど諸説あるが決定的な原因はわからない。「大きな環境介入なしにこんなことにはならなかった。これは壮大な実験で、患者たちの人生はその実験に巻き込まれたのです」と彼は言う。

実は、この巨大灌漑プロジェクトには日本も深く関わってきた。1980～2000年代、日本はスリランカ最大の援助国で、灌漑やダム、道路建設、TV局や病院施設など多方面に資金を投入した。乾燥地帯の農村で高齢者の調査をしていたとき、腎臓病患者の多さに違和感を覚えて調べ始めたのがきっかけだったが、思いがけず日本の開発援助がきたした破壊や苦悩に対峙することになった。

＊ ＊

2025年夏、私はマハヴェリ計画最後のダム建設地を訪れていた。水をせき止めるための迂回路づくりや、岩の隙間から滲む水をコンクリートで封じる工程を聞いたあと、同行していた映画監督ジュード・ラトナムさんが、「流れを止めようとする力と、滲み出す力とのせめぎあい。それがダムのテーマ」とつぶやいた。ぼーっとダムを眺めながらその言葉を聞いたとき、私は瞬時に、かつてある人の身体の叫びを全く聞きとれず、結果として深く傷つけてしまった日々を思い出していた。「正しさ」にとらわれ、制度の求める型へとその人を成形することに熱心になるあまり、不安や痛みを見ていなかった自分の姿。善意の名のもとに声や自然な生命の流れを押し込めてしまう力は、ダム、そして開発援助がもつ構造と似通っていた。

全てとは言わないが、ある種のフィールドに向かう際に感じる居心地の悪さの根底には、自分が加害の側にあるという感覚がある。しかし、(善意の／－故に根深い)暴力の過去と向き合うことは、自己否定に帰結しなくてもいいのだと、少しずつ思えるようになってきた。それはもしかしたら、水俣で「生きている言葉」に出会い、そのメディカル・アクティヴィズムから、あるいは小説や作品から、ないものにされがちな声や痛みへの感度をもって生きるというあり方を知ったからかもしれない。「こうあるべき」という「正しさ」によってではなく、他ならぬ私自身が他者とともに生きるあり方を学び直そうとフィールドへと赴く感覚が沸いてきたことは、私にとって何よりの贈り物であり、思いがけない仕合わせだった。

注

- 1) 山下善寛さんが地図を片手に市内を案内してくださったとき、私たちは無数の人の痕跡や記憶を目撃していたのだ。
- 2) 2016年～2019年度にかけて実施された水俣臨地キャンパスは京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の「臨地教育」の試みの一環として行われた。学部生・大学院生・短期留学生を含む多くの学生が参加。レポートは今も一部を除き一般に公開されている (<https://jisedai.asafas.kyoto-u.ac.jp/program/311/>)。
- 3) 臨地キャンパスの参加者には今日まで水俣と繋がり続けている人がいるが、Sese Maさんもその一人だ。親戚のおじさんのように気にかけてくださる高島さんに会い、ご家族や周囲の方々も含め物質的にも精神的にも支えられ、本当に有難いご縁を頂いた。私もつい最近そのご縁に勇気づけられた。この場を借りて、心から感謝申し上げます。
- 4) このことは翻って、〈いま・ここ〉を生きる自分自身を照射する。だから彼／彼女ら(私も)は「生駒さん、山下さん、谷さんらの話を聞くうちに、『自分の博士課程研究は何のためにあるのか』という根源的な問いに突き当たるのだ。」(Kia Meng 2017: 125-6)
- 5) 『水俣学研究』第14号の「研究会報告」(pp.73-111)。
- 6) <https://www.irrawaddy.com/news/burma/myanmar-junta-recaptures-mandalay-gold-mine.html>
- 7) <https://bkktribune.com/the-poisoned-rivers-from-gold-to-rare-earth-unregulated-mining-in-myanmar-poisons-the-mekong-and-its-tributaries-in-northern-thailand/>

引用文献

- 足立明「モノをめぐる水俣病事件の社会史」『水俣学通信』24号、2011年、p.7。
- 内山田康「特集・足立明教授追悼 異なるスケール、乖離した言葉、隠れたアクター、継れ」『アジア・アフリカ地域研究』13-2号、2014年、pp.148-173。
- 高道由子「二度目の水俣を訪問して——日常を生きる水俣の人々をどのように捉えていくか」『創発 2016 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2017年、pp.113-114。
- 土井清美「フィールドにて：上級編——身体を使って理解する」市野澤潤平・碓陽子・東賢太郎編『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年。
- 中野真備「地域に生きる人々——水俣病をとりまく「立場」の難しさ」『創発 2016 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2017年、pp.115-116。
- ピナード・アーサー（脚本）、丸木俊・丸木位里（絵）『紙芝居 ちっちゃいこえ』童心社、2019年。
- Girmai, Azeb. Minamata On-site Campus Report, 2019. 『創発 2018 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2019年、pp.35-37。
- Kia Men, Boon. Reflections on Minamata Onsite Campus: Minamata, Bukit Merah & the Crisis of Developmentalism. 『創発 2016 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2017年、pp.125-126。
- NRGI. 2018. *Natural Resource Federalism: Considerations for Myanmar*.
<https://resourcegovernance.org/sites/default/files/documents/federalism-considerations-form-myanmar.pdf> (2025年11月27日最終閲覧)。
- PACT. 2019. *The State of Artisanal Mining in Myanmar: Including field study and Human Centred Design (HCD) workshops with gold mining communities in Homalin Township, Sagaing Region*.
<https://www.delvedatabase.org/uploads/resources/The-State-of-Artisanal-Mining-in-Myanmar-Report.-PACT.-May28,2019.pdf> (2025年11月27日最終閲覧)。
- Saw Win Myo San. Minamata On-site Campus: An Unforgettable Experience. 『創発 2018 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2019年、pp.41-43。
- Sese Ma. The Everyday World of Minamata. 『創発 2018 臨地キャンパス・成果発信報告書』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター、2019年、pp.44-46。